

南方（ニューギニア）

ニューブリテン ラバウルで生き抜く

鳥取県 内林 嘉久

私は大正十一年五月三日、西伯郡大和村（現在淀江町）の農家で生まれました。昭和十七年徴集ですので、昭和十七年四月、日本通運の社員としての勤務地、中支南京で徴兵検査を受けました。入営のため日本に帰り、十七年十二月二十五日、大阪の信太山野砲兵隊に入って約一週間仮宿したのです。

昭和十八年一月出發、朝鮮半島を経由、鮮満国境、山海関を通過、一月十四日北支那徐州の、第十七師団、

野砲兵第二十三連隊へ入営しました。一期検閲後、幹部候補生教育は南京で約三カ月間受け、乙種幹部候補生として、南方作戦参加のため原隊復帰を命ぜられたのです。

南方へは上海から出港し三隻の輸送船での移動でした。ところが出帆一日目か、その晩に南支那海で潜水艦に雷撃を受け、連隊本部、第一、第三大隊の乗船が轟沈され、救助されたのは十数人のみでした。次の船も雷撃されたが蛇行航行し魚雷をかわし被害を受けませんでした。轟沈の船の十一人ほどは駆逐艦が救助し一日遅れて追及してきました。

途中、トラツク島で給油などのため停泊し、ラバウル上陸は昭和十八年十一月四日。上陸して砲弾等を多く集積しました。そのときは集積地のそばで野営し実

戦を味わうこととなります。

翌日荷降しをしていたら空襲があり、空襲の怖さも体験をしました。そのとき壕を掘っていたが、もの凄い爆撃で気が付いてみたら木も何もかも皆無くなり、まさに山形改まり壕も何もどこにあるか分からない。私たちは壕まで行かれず、ただ野を走っていて不思議に助かったわけです。

しかし、もし壕に入っていたら死んでいたでしょう。兵隊はただ右往左往、手の無いのや足の無いのがある。自分も体のどこか欠けているのではないかと思い、手や足をさすって、ああ、あると思った。

その空襲で第二大隊では二十七人が戦死してその葬儀をした。そこに三、四日いて、ニューブリテンの先まで行くので、ラバウルから駆逐艦が迎えに来て乗艦、ジグザグで進む。夜降ろされボートに移乗したが(二十何人か乗った)、皆で一生懸命漕ぐが舟が回ってしまつて進まない。

どうにもならぬと皆落胆していました。夜が明けたが空襲されるだろうと心はあせるし、皆疲労してしま

つたのです。そのとき、待望の大発(乗陸用の大型発動機船)が来てボートを引つ張ってくれ、ジャングルの木陰に入ったので、敵の偵察機は我々を発見しなかつたらしい。ちよつとも遅れて、発見されたら、後で爆撃されたでしょう。

そのときは、まだ海軍航空隊がラバウルにいて、上空を「日の丸」をつけた飛行機が飛んでいたが、その後次第に状況が悪くなり、日本軍の航空隊はだんだん少なくなる。それに引き替え、敵の戦闘機や爆撃機の来襲が多くなり、制空権はほとんど敵手に落ち、心細いものでありました。

我々の陣地に対しては、ラバウルの東から航空機で補給されていたが、食糧は潜水艦内で袋詰めにして、イカダに積み、水中より引つ張り、夜に島近くまで運んできていた。それを降ろすとまた、ラバウルに帰っていった。中にはゴム袋が破れ海水が入ったものもありました。空も海も敵に攻撃されるので昼間は補給がない。いわゆる蟻輸送でしか来ず、食糧すら補給できない状況になりました。

主食は米が幾分あったのですが、その後は収穫の早い甘藷を作り、米は留保して主食は藪だけとなりました。熱帯気候なので藪は三〜四カ月で食べられ、六カ月すれば完全に成熟しました。部隊では農耕班や漁労班を編成し、またパイヤ、バナナ、椰子、タピオカなど食料となる野草の採集をする班も編成されました。我が部隊は野砲隊でありましたが、ニューブリテンでは、馬もいないので挽けず、臂力搬送の山砲を持っていったのです。陣地のトーチカ（横穴式壕）の中から砲を出していました。

我々の一個大隊はおおむねかたまつて警備していたのですが、制空権が取られてからは敵機がひっきりなしに偵察していました。爆撃は夜間もありました。爆弾は五〇キロぐらいの小さいのから、一トン級のもあったようです。一トン爆弾は大きな穴を開けるが、土の軟らかい所では穴は小さい。高射砲を撃つがなかなか当らず、撃墜することはほとんどできなかったようです。

我が第二大隊は、ニューブリテン島の西側を守って

いました。海岸に陣地構築し、防空壕を掘り、さらに農耕も日課だったので。常時は艦砲射撃はなかったのですが、突堤の先を砲撃されたことがありました。各中隊との連絡はそこを通らねばならないが、突堤の所には砲火の臭いがして、余り気持ちの良いものではありませんでした。

爆撃に耐えましたが、艦砲射撃は二十分ぐらい続き、とても手が出せない（七・五センチの山砲では砲身の長い、口径の大きい軍艦の砲とは比較ならぬ非力）。上陸軍に応戦の機会はついになかったのです。

陣地付近には椰子が少しあるだけ、そのため敵戦闘機に銃撃されると椰子の木を回って避けられた経験がありました。通信隊では有線の通信壕を掘ったりしました。

私は無線班で壕の中で通信するのだが、雨が降ると大きな蛙が壕の中に入ってきて来る、それがいい蛋白食料となるのです。食料に難儀しているので、雨降りの蛙を捕って歩いたものです。

海岸の陣地はその後奥の方へ移動、大隊本部や予備

隊もさらに後方へ。戦況も悪くなり、我が部隊の所在も敵に分かつたらしく爆撃も多くなってきました。そのため転進することになり、司令部から「ラバウルに集結せよ」との命令がきました。

徒歩で何日かかるか分からないが、なるべく軽装にするよう努めました。食糧は取って置き、携帯用に糧を三日分ぐらい持って歩いた。次の拠点に着くと、そこで三日分補給を受けて歩く。その拠点部隊とは、今思うと恐らく兵站的な部隊であったのでしよう。

行軍中、雨の降る日もある。スコールがくると着たまま、自然に乾かし、宿泊は個人の天幕を持っていたのですが、後には重いので捨ててしまいました。したがって、着のみ着のまままで野宿をします。距離のことを計算すると、一日行程四里ぐらい。ジャングルの中を一人やつと歩けるような獣道の途中には亡くなった人が多くいました。

行軍で、最初は歩けぬ人は担架（木を切って巻脚絆で縛って作る）に担せ、四人で運んだが、自分の身がもたぬので仕方なく、手榴弾を与えて「自決せよ」と

言うのと、歩く者もいたが、隊列から離れ自決した者もいました。それを戦友が、爪や髪を少しずつ切って持って歩きました。死骸があちこちに一人、一人とありましたが、独特な臭いがするので、死体のあることが分かりました。

四十三日でラバウルに着いたが、自分の中隊では二人が転進中に亡くられました。その他漁労班でダイナマイトや手榴弾（投げ遅れ）で事故を起こした人もいました。ラバウルへ着いて戦闘準備をしているとき、終戦となりました。

連合軍はラバウルを敬遠して、攻撃の構えはしたが主力は比島方面へと向かっていったのです。昭和十九年の夏には南洋委任統治地のサイパン、テニアン、グアムと進攻し、航空基地を占領し、トラック島の海軍根拠地をつぶす。主力はフィリピンを占領し、沖縄を玉碎させたのは昭和二十年六月で、日本本土を包囲し、ついに終戦となったのです。そのような戦況の推移などは我々ラバウル部隊はほとんど知りませんでした。

終戦後は豪州兵が上陸してきて武装解除を受けまし

た。マラリアの高熱と悪寒で苦勞しましたが（私も罹病）、丈夫な者が使役に出されました。仕事は荷物の荷揚げ、兵舎の建築、掃除などでありましたが、「なるべく地下足袋を履くな」と注意がありました。なぜかという、豪州兵は戦闘中、地下足袋を履いた日本兵に夜襲されたためだということでした。そのため軍靴を履かされたのでした。豪州兵は余り悪くなかったのですが、戦争中、日本軍にやられた下士官、兵に報復された者もあつたのです。

ラバウルは大基地であり、砲弾や糧秣・被服なども蓄積されていたようです。戦争後は食糧の支給を受け、米や乾パン（日本軍の物か）も食べられるようになりましたが、栄養失調や病気で三分の一は死んだといえます。（内村氏に罹病の証明書を見せられた）

帰国のための出帆は、昭和二十一年五月三日（日本の輸送船）にて出帆、名古屋港に上陸して、復員をしたのは五月十四日でした。

帰ってからは実家で農業をやっていましたが、復員後、マラリアは一、二回出たがその後は出ず、入院も

しませんでした。

ソロモン群島転戦

本隊玉砕墓島

ブーゲンビルの二年間

島根県 松本良造

大正十一年七月一日、現住所の出雲市今市町で出生。家業は農業、父は健在、母は義母、姉妹という家の長男でした。昭和十七年七月の徴兵検査でした。

（持参された「徴兵検査通書」には：

「右徴兵検査執行ニ付左記日時徴兵署ニ出頭シ本書ヲ以テ徴兵署ニ届出ツヘシ

出頭日時 昭和十七年七月三十一日午前七時

徴兵署出雲市今市国民学校北校舎

昭和十七年七月一日 市長 岡田秀勝」

裏面には

「受検ニ関スル心得（片仮名フリ）」